



主神・ゼウス



クロノス/レイア……………ゼウスの両親
 ハデス/ポセイドン……………ゼウスの兄
 ヘラ……………結婚と家庭、女性の守護神。ゼウスの妻
 メティス/テミス……………ゼウスの最初の妻と二番目の妻

オリュンポスの主神であり神々の王であるゼウスは、全知全能であり、全宇宙を支配する絶対なる神で、その手にはすべての世界を破壊してしまうほどの力を秘めた雷を握っています。

ティタン神族であるクロノスと女神レイアの息子で、冥界の王ハデスと海神ポセイドンの弟として生まれました。ゼウスの父親であるクロノスは「生まれてくる子供に殺される」との予言を恐れており、妻のレイアが産んだ子供を次々と飲み込んでしまっていました。これに悩

んだレイアはこっそりとゼウスを出産し、クロノスに見つからないように孤島でニンフたちに育てさせました。成長したゼウスはクロノスに薬を盛って皆を吐き出させ、助け出した兄弟と協力して父親を天界の王座から追い落とす戦争を起こしました。この全宇宙を巻きこんだ、ティタン神族とオリュンポスの神々との戦いは「ティタノマキア」と呼ばれ、十年間も続きました。

長かった戦いがようやく終了し、ハデス、ポセイドン、ゼウスの三人はそれぞれが支配する場所を決めるためにくじを引くことになりました。その際「どうしても地下の国には行きたくない」と考えたゼウスは、このくじにイカサマ

をして、自分が天界の王になれるように細工していました。ハデスだけはこのゼウスの不正に気がついていましたが、特に天界の王位に興味もなかったので、黙って冥界の王になることを受け入れました。

このようにして神々のトップに立ったゼウスでしたが、結婚に関しては自分の思うようにはならなかったようです。彼の妻として有名なのは結婚と純潔の守護神ヘラですが、実はゼウスには、ヘラと結婚する前に二人の妻がいました。

最初の妻は知恵の女神メティス。しかしゼウスの祖母であるガイアから「メティスとの間に生まれる息子に天界の王位を奪われる」と予言されていたため、父クロノスと同じように妊娠していたメティスを飲み込んでしまいました。女神メティスのお腹の子供はそのまま大きくなり、ついにはゼウスの頭から大人の姿で飛び出

しました。このようにして生まれたのが、戦いの女神アテナです。

次にゼウスと結婚したのは捉の女神テミス。テミスはウラヌスとガイアの娘であり、ゼウスは彼女との間に運命の三女神モイライ、季節の女神ホーラ、正義の女神アストライアをもうけています。

そして最後にして最も長く妻の座にあり続けるのが「神々の女王」、結婚生活と母性と貞操を司る女神ヘラです。実はゼウスがヘラの美しさに一目惚れして求愛したとき、まだテミスと結婚していません。しつこくつきまとうゼウスに対してヘラは「どうしても自分と一緒にになりたいのなら、テミスと離婚して自分と結婚するように」という条件を出しました。ゼウスはこの条件を受け入れ、女神テミスと離婚してヘラと結婚することを選びました。ゼウスとヘラの

間には軍神アレス、お産の女神エイレイテュイア、若さと青春の女神ヘベ、鍛冶の神ヘパイストスが生まれています。

これらのほかにも自分の姉でもある豊穰の女神デメテルとの間にペルセポネを、女神レトとの間にアポロンとアルテミスの双子神をもうけ、愛と美の女神であるアフロディーテとも恋人関係であったと言われています。

ゼウスの恋人は女神だけではありません。人間の女性ともたびたび恋人関係になっていました。テーバイの女王セメレーとの間に生まれたのは酒神ディオニュソス、アルゴス王アクリシオスの娘ダナエとの間にペルセウスを、ミュケナイ王女アルクメネとの間にヘラクレスをもうけています。

ゼウスは恋人の元に通うときには相手に警戒されないように(妻のヘラに見つからないよう

に)さまざまな姿に変身していました。スパルタ王妃レダのときは白鳥に、テュロス王の娘エウロペのときは白い牡牛に、ペルセウスの母になるダナエのときには黄金の雨にといった具合です。

ところが相手の女性にとって、ゼウスに愛されるということは幸せにつながるとは限りませんでした。ゼウスと関係を持つことは女神ヘラの壮絶な報復を受ける危険もはらんでいたのです。

狩猟の女神アルテミスに仕えるニンフの一人であったカリストは、ゼウスの愛情を受けて息子アルカスを出産しました。アルテミスはカリストが「純潔の誓い」を破ったことを怒り、彼女を真つ黒な大熊の姿に変え、追放してしまいます。十五年の歳月の後、立派な狩人に成長したアルカスは森ですばらしい毛皮をもった大熊

を見つけ、それが母親であるとも知らずに弓矢で射殺そうとしました。この様子を知ったゼウスは、アルカスを小熊の姿に変えて母親と一緒に天へ放り投げ、星座に変えてしまいました。しかしこれに激怒したのが妻のヘラです。ヘラはカリスト親子を嫌い、天の一点を指して動くことのない北極星で彼女を空に縫い止めてしまいました。そして星座たちが疲れを癒すために海に入って休んでいる間も、カリストとアルカスだけは休むことを許しませんでした。そのために「大熊座」だけは年間を通して北の空にその姿を見ることができるようです。

ゼウスに関してはこのような神話も残っています。

あるときゼウスは、トロイアの地でガニュメデスという美少年を見つけました。ちょうどその頃娘である青春の女神ヘベがヘラクレス(死

後、英雄から神に昇格した)と結婚したことで、神々の宴会で酒を注ぐ役目を果たす者がいなくなり、困っていたところでした。ゼウスは「この美しい少年にその役目を与えよう」と考え、大鷲の姿を変えてガニュメデスの体を掴み、天界へ連れ去ってしまいました。オリュンポスの神々と共に宴の席に並ぶことを許されたガニュメデスには永遠の若さと不死が与えられ、その父には息子を天界へつれて行った代償としてすばらしく脚の早い神馬が贈られました。

夜空に輝く「水瓶座」は神々の飲み物である神酒ネクタルを注ぐガニュメデスの姿であり、「鷲座」は彼を天界に連れ去ったゼウスの姿です。

ゼウスの雷霆

オリュンポスに君臨する主神ゼウスの手にする武器です。

恐ろしいまでの破壊力を持つ雷で、これに撃たればすべてのものが一瞬で焼きつくされてしまうとされています。

大地母神ガイアとの戦い「ギガントマキア」で、一〇〇の頭を持つ怪物テュポスがオリュンポスの神々に襲いかかったとき、ゼウスはこの雷を放ってテュポンを焼き滅ぼしています。

これをつくったのはゼウスの息子であり鍛冶の神であるヘパイストスで、出来栄えに大満足したゼウスは美の女神アフロディーテを妻として彼に与えました。

ペガサス

ゼウスの雷光を運ぶ、翼の生えた空飛ぶ馬ペガサス。この馬はベルセウスによつて切り殺された怪物メドゥーサの血から生まれ、どれだけ走っても疲れることはなく、風よりも早く天を駆ける不死身の存在でした。ペガサスがその蹄で大地を一蹴りすれば、そこには澄んだ泉が湧き出るとも伝えられます。

決して人に慣れることのないペガサスですが、戦の女神アテナだけがこの天馬を従えることができたため、アテナから黄金の轡を与えられた者だけが乗りこなすことができました。